



西幼だより

羽島市立西部幼稚園
令和5年2月15日 No. 19
園長 安藤賢治

「いただきます」「ごちそうさまでした」

「いのちをいただく」

(西日本新聞社 参考)

坂本さんの職場では毎日毎日たくさんの牛が殺され、その肉が市場に卸されている。牛を殺すとき、牛と目が合う。そのたびに坂本さんは(いつかこの仕事をやめよう)と思っていた。

ある日の夕方、牛を荷台に乗せた一台のトラックがやってきた。(明日の牛か...)と坂本さんは思った。しかし、いつまで経っても荷台から牛が降りてこない。不思議に思って覗いてみると、十歳ぐらいの女の子が牛のお腹をさすりながら何か話し掛けている。その声が聞こえてきた。

「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ...」坂本さんは思った。(見なきやよかった)

女の子のおじいちゃんが坂本さんに頭を下げた。

「みいちゃんはこの子と一緒に育てました。だけん、ずっとうちに置いとくつもりでした。ばってん、みいちゃんば売らんとお正月が来んとです。明日は、よろしくお願いします...」(もうできん。もうこの仕事はやめよう)と思った坂本さん、明日の仕事を休むことにした。

家に帰ってから、そのことを小学生の息子のしのぶ君に話した。しのぶ君はじつと聞いていた。一緒にお風呂に入ったとき、しのぶ君は父親に言った。

「やっぱりお父さんがしてやってよ。心の無か人がしたら牛が苦しむけん」しかし、坂本さんは休むと決めていた。

翌日、学校に行く前に、しのぶ君はもう一度言った。「お父さん、今日行かないよ! (行かないといけないよ)」坂本さんの心が揺れた。

そして、しぶしぶ仕事場へと車を走らせた。牛舎に入った。坂本さんを見ると、他の牛と同じようにみいちゃんも角を下げて威嚇するポーズをとった。

「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならんとみんなが困るけん。ごめんよう。」と言うと、みいちゃんは坂本さんに首をこすり付けてきた。殺すとき、動いて急所をはずすと牛は苦しむ。

坂本さんが、「じつとしとけよ、じつとしとけよ。」と言うと、みいちゃんは動かなくなった。

次の瞬間、みいちゃんの目から大きな涙がこぼれ落ちた。牛の涙を坂本さんは初めて見た。...

(「ずいごい“人たち”水谷もりひと 本文より)



～伝え教えるタイミングは、それぞれでしょうが、ひとつ参考までに～
(大人向けのお話ですね)

■熊本県の食肉加工センターに勤務していた坂本義喜さんの実話です。
「命と食」の講演を経て、絵本(作:内田美智子)となって広まりました。
...わかっていることとはいえ、「子育て」で、食べ物のありがたみを伝えることは難しい、食べ物を粗末にしてはならないと教えることも難しいことです。...**しかし、今は!**



➤<食育>で大切なのは、まずは『**楽しく!**』です。

「残しても大丈夫」だと、リラックスさせつつ“食べる子供の気持ち”に寄り添って「**食を好きになること**」が一番ですね。

- 食べさせたいがために、感謝の強要は・・・×
- 残さず、なんでも食べなさいの強要も・・・×
- その子に合った食事量や食べ方で・・・○(追々)

➤それより...危惧するのは、<にわとり症候群「**こけこっこ〜**」>

- こ：孤食(独りで食べる)
- け：欠食(朝食を抜く)
- こ：個食(家族がそれぞればらばらな物を食べる)
- こ：固食(好きな物ばかり)
- *他にも、
- こ：粉食(粉原料ばかり)
- コ：コンビニ(…ばかり)